

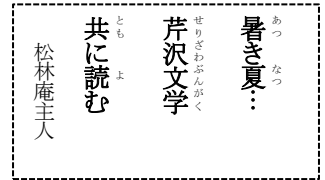
芹沢文学読書会

案内通信
No. 168
2024年6月22日(土)
(令和6年)

6月便り

6月になり、真夏の日々が続きました。沼津市など線状降水帯で記録的大雨が降った地域もありましたが、中々梅雨になりませんでした。やっと北部九州も梅雨となりましたが、高温が続いています。今年も猛暑の夏になりそうですが、地球温暖化のためと思われます。世界では、ロシアのウクライナ侵略が続けられ、イスラエルによるガザ地区攻撃が止みません。多くの犠牲者が出て、国土が破壊され続けています。悲惨なことです……。芹沢文学は戦争反対です。この地球には核兵器の無い世界平和を実現したいものです。

今年も芹沢文学読書会を継続しています。今回の読書会も、『思い出すこと』の批評の二章を読み語ります。梅雨の季節ですが、お元気に読書会にお出掛け下さい。



第168回・芹沢文学読書会

- ①日時: **7月14日(日)** 午前10時~12時 [*平城は第2日曜日午前です]
②会場: **大分県立図書館 研修室 No.5** [*平常は研修室No5です]
③内容: **[I] 芹沢文学に関する話題や情報** 10:00~10:10 am 自由に話す。

[II] 芹沢文学読書会 10:10~12:00 am 参加者で輪読

○テキスト①「**三 パリで死んだ二人の女主人公**」 ②「**四 人生をテーマの小説**」

*①は、『芹沢光治良文学館』の第五巻で、長編小説の『巴里夫人』と『巴里に死す』が収録されています。『巴里に死す』は戦中昭和17年の作品です。『巴里夫人』は戦後の作で、実在夫人の伝記小説です。

②は第二巻で、人生をテーマにした三作品『未完の告白』『花束』『女にうまれて』が収録されています。これらは特別に人生をテーマにしたわけではないが、敗戦後に書いた長編で、女主人公の作品です。

初出/『芹沢光治良作品集』(新潮社発行)の全16巻の月報に連載されました。昭和49年2月~同50年5月。

初刊本/『**こころの広場** 第三章 思い出すこと』昭和52(1977)年4月15日 新潮社発行。全245頁、800円。

再録/『**芹沢光治良文学館 12**』平成9(1997)年8月10日 新潮社発行に再録。 **246~254頁**。

=次回は、**9月8日**(第2日曜日)午前の予定です。 =

◎同封資料; 随筆(旅案内)「**伊豆の西海岸と尾道の街**」**芹沢光治良** 昭和35(1960)年4月1日発行 日本交通公社社発行雑誌<旅>4月号。40~41頁。 *「第1特集 日本で味わう異国情緒」に依頼されて書いた旅案内です。フランスの地中海カシーと伊豆の戸田、ノルマンディのホンフルールの漁港と尾道を比較して回想的に書いています。同封資料は、縮小(×0.90)してB4に収録したので、活字が小さくてすみません。拡大鏡で大きくしてゆっくりお読み下さい。 **[資料提供/中村輝子]**

芹沢文学・大分友の会



連絡先: 〒872-1651 大分県国東市国東町浜 4765(番地) 小串信正方

☎ FAX 0978(77)0565 郵便振替口座 01970-5-16072/芹沢文学・大分友の会

☆ 第167回・芹沢文学読書会の報告

於 大分県立図書館・研修室No.1 ♪♪♪♪

第167回の芹沢文学読書会が、5月19日(日)に大分県立図書館の研修室No.1で行われました。芹沢光治良記念文化財団のポストカード「ブルジョア・結核患者」や芹沢文学館の頃の会報「芹沢・井上文学館 友の会会報 158」を今回も参考資料として参加者に渡しました。連載 芹沢文学入門83「『芹沢光治良作品選集』の出版を」(小串信正)や小山武夫文芸講話や第10回「我入道の集い」が掲載されました。古賀さんが欠席し、来る予定であった福津の田中さんも来られませんでした。

今回からのテキストは、『こころの広場 思い出すこと』[『芹沢光治良作品集』全16巻の月報]の二評論で、①「『海に鳴る碑』と『愛と知と悲しみと』」②「ニ 青春小説」を読み語りました。

次回も、『こころの広場』の第三章「思い出すこと」の二評論を読み語りたいと思います。

【芹沢文学案内 No.111】 評論「ブルジョア」(芹沢光治良著) 桐村涼

◇ ♣ ♡ ♡

(株)ぎょうせいの『日本文芸鑑賞事典-近代名作1017 選への招待-』第9巻(昭和2~5年)が昭和63年1月17日に発行されました。この中に芹沢光治良が改造社の懸賞小説に応募し、一等に選ばれた出世作と言える中編小説「ブルジョア」が紹介されています。桐村涼氏が書いた評論です。9頁の批評で、良く書かれていますので、紹介して、問題点も書いてみたいと思います。

【ブルジョア】の表紙

副題として「1920年代のヨーロッパの不安を描いた小説」とあり、「この作品の3つの特色」の①に「[注/日本作家が創作した]初の国際小説」と評価しているのは面白いと思います。「この作品のあらまし」に沢夫妻のこと。夫の闘病とフランスの紳士(ペルトラン)と夫人の密会のこと率が率直に書かれています。サーシャ嬢と従兄で共産党員のピエール、沢を愛しているミリッサ等も登場します。「この作品の読みどころ」には、「カメラ・フラッシュのような文体」で「複眼的に登場人物それぞれの立場や主義主張からの視点で描かれています」と書いているのは的確な批評です。この作品は全四章で、退院を祝う会の大舞踏会で終わっています。沢夫妻を芹沢夫妻の実体験を私小説に書いたものと思う読者がいますが、この作品は虚構された小説として読むべきです。「この作品鑑賞の手引き」に昭和五年七月に改造社発行の新鋭文学叢書の一巻として、単行本『ブルジョア』が紹介されています[注/題は「ブルジョア」でなく、どうしてか「ブルジョア」となっています]。「昭和四年十月に帰国」は「昭和三年十一月に帰国」の間違い、「モダニズムの文体」は「フランス語の直訳の文体」に、「処女作」は「出世作」とする方が正確です。「創作の動機-作者と作品のかかわり」の芹沢光治良の生年を「明治三十年」と書いているのは、現在では戸籍登録の「明治二十九年」に改められているのですが、様々な理由で、私も「明治三十年」生まれが正しいと思っています。「父が天理教に入信したために、警察の弾圧を受け、村にいられなくなつたや「故郷を逃げた父」は、誤解です。実家の天理教会が許可されませんでした。弾圧までは無く、逃げたのも無く、自主的に無所有で出家したのです。次男の光治良は、祖母に懐いていたので残したのであり、捨てて行ったものではありません。フランスのパリに留学して「第一次世界大戦を見聞しフランスの文学者とも親しく交際します」は、「第一次世界大戦を体験して大河小説を創作したフランスの文学者達に学び交流し、太平洋戦争を体験した芹沢光治良は、日本の戦前戦後を大河小説『人間の運命』として創作したのです」と書くべきだと思います。

この機会に出世作『ブルジョア』を、小学館発行の『ブルジョア・結核患者』で再読下さい。①